

ディズニー作品から考えるポリティカル・コレクトネス

——「ポリコレ疲れ」は本当か？——

本研究は、近年用いられる「ポリコレ疲れ」という言説に着目し、その実態と背景を明らかにすることを目的とした。ポリティカル・コレクトネスはしばしば「行き過ぎ」「表現の制限」と批判されることが多く、特にディズニー作品において、近年語られるようになった。こうした理解が果たして妥当であるのかという問題意識から本研究を行った。

ディズニー作品においてPCがどのように反映されているか作品を事例として分析を行った。特に実写版『リトル・マーメイド』に注目し、アニメーション版との比較からキャラクターの設定、楽曲の変更点・追加要素を探り、考察した。また、批評家や世間一般による評価を参照し、社会的受容のありかたについても検討した。

分析の結果、実写版『リトル・マーメイド』における多様なキャスティングや、歌詞の変更点・追加要素は表現の自由を損なうようなものではなく、現代の価値観に合わせた再構築の試みであり、実写版『リトル・マーメイド』を通して様々な批判や賞賛が集まったことは、社会的対話を促す契機になった。

ではPCに対し、特に日本社会において、「行き過ぎ」といった声が挙がり、構造の問題として捉えることができないのはなぜなのか。新自由主義的な政治が進行した後「自己責任」そして「個人化」が進む社会となったことにより、差別や不平等などが「個人の問題」として捉えられることが多く、構造的な問題としての理解が進んでいないことがこうした批判の声が挙がる要因の1つとなっていると考えた。

以上のことから、「ポリコレ疲れ」とは、PCが社会に浸透した結果生じた現象ではなく、むしろその理解が進んでいないことの表れである。依然としてポリティカル・コレクトネスを巡る議論において、「表現の制限」といった表面的な理解に留まってしまっていることの表れであると結論づけた。今後は、対話を重視し、教育やメディアリテラシーを通じてPCの意義を構造的に理解する姿勢をそだてていくことが求められる。